

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：32645

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320070

研究課題名(和文) プラハとダブリン、20世紀文学の二つのトポス 言語問題と神秘思想をめぐって

研究課題名(英文) Prague and Dublin, Two "Topoi" of the European Literature in the 20th Century - an inquiry into Linguistic Problems and Mysticism

研究代表者

城 眞一 (Jo, Shin'ichi)

東京医科大学・医学部・教授

研究者番号：60424602

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円、(間接経費) 4,050,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ文学史上「言語危機」と称される現象が、同時代のプラハとダブリン文学の代表的詩人たちに通底する拡がりを有することが論証された。まず「危機」の諸相が個々の詩論において検証され、次に相互比較によって影響関係が闡明され、最終的にそれらが新たな次元での神秘的言語体験によって克服される経過が立証された。とくに実在論を否定する唯名論的言語批判論者、F.マウトナーの学説の射程は、ヴィーコの名とともにジョイスとベケットに到達していたことが、言語圏を超えた横断的共同研究によって初めてテキストレベルで解明された。以上を以て、20世紀文学最大のテーマ「言語問題」の由来とその超克について、一つの解釈を提示した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to suggest that prominent writers in Prague and Dublin in the early 20th century, such as Kafka, Rilke, Yeats, Joyce and Beckett, were obsessed by the German literary idea of "Sprach-Krise" or crisis of language. In order to prove the interrelation of these writers, first, we have made it clear that many aspects of "Sprach-Krise" were evident in their poetics. Then, by comparing their poetics, we have come to understand how they tried to overcome the problem of ineffability through mystical experiences in their own ways. Finally, we have discovered that Mauthner, who had an extremely nominalistic view of language, exhibited great influence on Joyce and Beckett. Through critical analyses of the texts by Joyce and Beckett, we can conclude that it is via Vico's philosophy that Mauthner and these Irish writers are closely related. Thus, our research helps to elucidate the genealogy of "Sprach-Krise", one of the greatest literary themes in the 20th century.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：独文学 英文学 プラハとダブリン 言語危機 マウトナー ジョイス ベケット 神秘思想

### 1. 研究開始当初の背景

2010年3月に終了した基盤研究(A)「プラハとダブリン — 20世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』」のテーマを継承発展させたのが、当企画である。第一期の「プラハとダブリン」においては、両都市出身の詩人すなわちリルケ、カフカ、イエイツ、ジョイスらの、国家・言語・宗教に係わるアイデンティティの揺らぎが、新たな言語芸術創造の主要な動機を成していることが確認されたが、その際の主たる考察対象は「ナショナル・アイデンティティ」の欠如とその代償としての言語創造であった。たしかに言語危機と宗教的アイデンティティの喪失を対象とするすぐれて深い論考は前回の企画においても随所で報告されていたものの(河中のマラルメとニーチェ論、平野のマウトナー論、城のリルケ論、結城、吉川、戸田らのジョイス論等)、それらの系統だった全貌はいまだ把握されてはいなかった。従って第二期「プラハとダブリン」の研究に入る際、世紀転換期におけるこの二都市の言語的・宗教的アイデンティティの欠如の実態を精査することが、まず焦眉の課題であった。ちなみに2011年の研究開始時点で、政治抗争と文化衝突の街プラハとダブリンの文学に注目して、「言語」という20世紀最大の文学的テーマの由来と行く末について解釈を提示する試みは、内外の文学研究史上、ひとり我らの先行研究、第一期「プラハとダブリン」を数えるのみであった。(この項、2006-2009年度の第一期「プラハとダブリン」成果報告書を参照のこと)

### 2. 研究の目的

前項で触れたが、20世紀最大の文学的テーマのひとつ「言語問題」について一定の解釈を提示することが第一の目的である。副題の第二項目「神秘思想」には、その過程において必然的に遭遇することとなる。言語的アイデンティティと宗教的アイデンティティの危機は深い関連を有するがゆえに併せて問われるべきとの直観的な認識を、我々は共有していた。何らかの言語危機が克服されるのは、他ならぬ新たな次元での言語体験 — それは一種の神秘体験としか言いようのない統合的な言葉の体験 — によってであることを、個々の原典に即して論証する。これらに基づき、プラハとダブリン両都市の精神的風土に着眼して上記の二テーマを追究した我々の方法の正当性をも立証する。

### 3. 研究の方法

初年度から独文学研究者と英文学研究者の相互の対話と原典の突き合わせを最重要の方法とみなし、主に言語問題について意見交換をした。ただしベケット研究者らを新規の共同研究者として迎えたこともあって、これまでの個別研究を相互に報告しあう機会を必要に応じて設けた。2年度目には、言語危機のいわば「震源」に当たるフリッツ・マ

ウトナーの言語批判論を媒介項として、カフカ、ジョイス、ベケットらの言語観を同一の思想的連関のうちに捉えることを試みた。最終年度には、神秘思想とのかかわりを、イエイツ、ベケット、リルケ、カフカからの詩論において検証した。神秘体験は通常の言語使用を超えた位相に想定されるにもかかわらず、それが啓示されるのもまた何らかの言葉であるとの洞察に基づき、これらの詩人たちに共通するキーワード「亡霊」と「声」によって原典を解釈し、それらの解釈を並置し、互いに共鳴させあった。

共同発表の場として、マウトナー関係についてはシンポジウムと講演会を各一回(2年度目と3年度目)、神秘思想関係ではワークショップを企画した(3年度目)。これらはすべて実現され、期待した以上の成果と反響が得られた。

招聘講演としては、初年度には東京医科大学精神医学講座の飯森眞喜雄教授に、2年度目にはヴァイマル音楽大学のS.ヘーネ教授、3年度目には京都大学の西村雅樹名誉教授、東京工業大学の木内久美子准教授、グラーツ大学のD.ゴルトシュニッグ名誉教授にそれぞれ依頼し、すべて実現を見た。前項とも詳細は業績一覧を参照されたい。

### 4. 研究成果

そのサブタイトルにもあるように、当研究課題は、当初、「言語問題と神秘思想」という二つの主題を設定していた。しかし、この二項は、それぞれ孤立した問題として生じたわけではなく、さまざまな関連のなかに位置している。たとえば、その前半をなしている「言語問題」は、前回の基盤研究(A)において提起された問題を継承して、「ナショナル・アイデンティティ」から「言語問題」へという、移行の契機に注目することによって遂行されることとなった。その際に主としてボヘミア生まれの在野の思想家フリッツ・マウトナーの自伝、著作を検討し、その社会史上の位置価値、およびその言語論のもつ特異な意味を把握し、認識することが、本研究の中心となったのも、故なしとしない。

その成果を最初に発表する機会となった、日本独文学会2012年度秋季研究発表会におけるシンポジウム「プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学の二つのトポス(その2)フリッツ・マウトナーとその射程」(10月14日、中央大学)では、ドイツ・ナショナリズムと「言語批判論」という、およそ二律背反としかみえないマウトナーの思想的位相を、そのままシンポジウムの二部構成に反映させることによって、問題のありかを浮びあがらせることを企図した。最初に城真一が主として自伝 *Prager Jugendjahre* (1918) に拠りつつ、この構図を明らかにしたのち、それをうけて、石川達夫、田多良俊樹が、それぞれボヘミア、アイルランドにおける言語運動としてのナショナリズムの、その象表的、

記号的性格を指摘した。それがただのアナロジーにとどまらない所以は、シンポジウムの後半部において平野嘉彦と戸田勉が論じた、フランツ・カフカとジェイムズ・ジョイスおよびサミュエル・ベケットにおける、マウトナーの主著 *Beitraege zu einer Kritik der Sprache* (1901-02) の影響のあとをみても、よく理解されるところである。このシンポジウムの成果をまとめた研究叢書には、さらに川島隆がマウトナーの小説作品におけるナショナリズムの問題を扱った論文を寄稿している。

こうしたさまざまな関連を明らかにすることは、そもそもプラハとダブリンの文学を比較、照合するという、当研究課題の方法にそっていた。それをさらに徹底させたのが、研究協力者として木内久美子、西村雅樹の二人を招いて開催したマウトナー講演会 (2013年10月19-20日、京都大学文学部) である。そこでは、前年のシンポジウムにおいて戸田がとりあげたマウトナーのジョイス、ベケットにたいする影響を、木内が敷衍しつつ、マウトナーも引き継いでいるジャンバッティスタ・ヴィーコの擬人化批判を、ベケットがそのジョイス論において深化していく経緯がしめされた。西村は、おなじ世紀転換期のオーストリアに生きた批評家ヘルマン・パールの、マウトナーにたいする共鳴を立証したが、その際に、西村がマウトナー晩年の「神なき神秘説」への傾斜に言及したことは、当研究課題のもう一方の項である「神秘思想」への関連を示唆したという意味でも、きわめて重要であった。最後に平野がマウトナーの言語思想におけるフリードリヒ・ニーチェの影響を指摘したが、これは、ニーチェにはじまるヨーロッパの思想的近代のなかにマウトナーを位置づける試みの一端として評価されよう。

サブタイトルの第二項目「神秘思想」にかんして、我々は当初、イエイツ、ベケット、リルケらを考察対象とする予定であったが、これにカフカを加えて、創作過程における神秘的なるものの機能を確定する作業を進めた。なかでもイエイツとリルケは両都市の双壁をなすオカルト主義者であって、後者においては「詩人」に先立って「オカルト主義者」が存在したことが判ってきた。詩人以前のリルケが傾倒した、例えばカール・ドゥ・プレル男爵の「自動書記」および「霊魂一元論」の理念は、同時代の広範な流行思想であって、汎ヨーロッパ的な現象であったことも判明した。一方のイエイツにおいては、降霊術的方法が自己様式化のための必須項目となり、実生活と創作方法を決定していたことが確認された。

言語の危機的体験を癒やす力としての「亡霊」の「声」の詩論は、如何なる形態をとって展開されるか、— この野心的な試みは、日本英文学会関東支部 2013 年度夏季大会 (6月22日、明治大学駿河台キャンパス) にお

いて、ワークショップ「モダニズムにおける<亡霊>と<声> — ダブリンとプラハを中心に」の標題のもとに遂行された。導入と司会役の吉川信が冒頭でイエイツの詩 *The Spirit Medium* (1936-39) ほかを引用して全体のコンセプトを提示した。桃尾美佳はこれを受けて、イエイツの演劇作品 *The Words upon the Window-pane* (1930) など死者との邂逅を主題とする作品をとりあげ、亡霊表象の変遷を、視覚と聴覚に係わる描写に注目して検証した。岡室美奈子は、そのイエイツがベケットに与えた影響を前提に、降霊術とメディア・テクノロジー即ち霊媒と媒体という二つの「メディウム」の交錯する状況を、テレビドラマ *...but the clouds...* (1977 放送) において論じた。城眞一は、リルケが「近代」以前の多様な時空から形成した詩論が、じつはモダニズムにおけるオカルト的なものを体現していることを、詩人自身による降霊会報告 (1912) を紹介しつつ論証した。さらに川島隆は、カフカにおける降霊術と新メディアへの関心に着目し、「書くこと」と亡霊との関わりを短篇『流刑地にて』(1919) 等を引用しつつ詳細に論じた。

このワークショップは、出席した若手の研究者たちに強い印象を与えたのみならず、企画した我々自身にも、かなりの刺激を与えた。なぜなら、既存の文学研究の枠ではどうも叶えられえない横断的視点とテーマ設定によって、20世紀文学を押し開いた傑出した詩人たちが、個性的な詩論を追求しながらも、これほどまでに共通して「亡霊」の「声」の力に依拠しつつ作品を紡ぎ出していた実態が、少なくとも内外の英独文学研究史上はじめて一堂に集約され、明らかにされたからである。この一連の事実が、あたかも我々にその謎を解けと迫りくるかのような印象を与えたとしても不思議ではない。我々は近代思想史の連関においてこの事柄のもつ意味の総体をやがて問わざるをえなくなると痛感した。この作業はしかし新たな企画を要求するであろう。

以上のごとく、当初の研究計画と研究目的は、大筋において実現され、達成されたと思われる。ただし、研究の大枠を保持するために労力を費やし、当初予定されていた多様な魅力的なケース・スタディの数々は、残念ながら共同の議論の場には上らなかった。それらのあるものについては年度別の研究実績報告書に収録してあるので、そちらを参照されたい。

末筆ながら、招待を受けてこころよく講演を引き受けてくださった方々に、忌憚のない意見をたまわった研究協力者の方々に、改めて謝意を表したい。また、長年にわたって研究の文字どおりの担い手であった研究分担者の方々に、たえず新風を吹き込んでくださった連携研究者の方々に、そしていまなお我らの盟友である4名の方々の霊に、この場をかりて謝意を表したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計32件)

- ①岡室 美奈子、瓦礫の上で待ちながら — ベケットと共生の思想、文学、査読無、15-2、2014、2-15
- ②吉川 信、Lafcadio Hearn's Interpretation on Japanese Religions、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読有、63、2014、69-78
- ③Yoshihiko Hirano、Die Kafka-Rezeption in Japan um 1960. *Partei* von Kurahashi Yumiko und *Die Frau in den Duenen* von Abe Kobo. In: Steffen Hoehne / Ludger Udolph (Hrsg.): Franz Kafka. Wirkung und Wirkungsverhinderung. Wien u.a. (Boehla), 査読有、2014、397-413
- ④田多良 俊樹、James Joyce の “Great Hunger” — ポスト大飢饉小説としての *Ulysses* 英語と英文学と— 田村道美先生退職記念論文集、査読無、2013、23-32
- ⑤結城 英雄、アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス (4)、法政大学文学部紀要、査読無、67号、2013、pp. 27-38
- ⑥結城 英雄、『ユリシーズ』を読む— 100のQ&A— (14)、すばる、査読無、7月号、2013、pp. 286-300
- ⑦川島 隆、マウトナーの二つのボヘミア小説 — 同化ユダヤ人の「母語」と民族アイデンティティをめぐって、ナマール、査読有、(18)、2013、51-61
- ⑧川島 隆、ゲーテを読むカフカ — 「大文学」と「小文学」のはざままで、モルフォロギア、査読有、(35)、2013、86-103
- ⑨吉川 信、ジェイムズ・ステューヴンズの幻想小説、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読有、62、2013、69-83
- ⑩石川 達夫、チェコの民族運動と言語闘争 — 非自明性打破の手段としての記号的世界の構築と現実化 — 、城真一編「日本独文学会研究叢書」(『プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (その2) — フリッツ・マウトナーとその射程』)、097、査読無、2013、6-21
- ⑪田多良 俊樹、アイルランド民族運動における言語的「内紛」— ゲール語連盟、アイルランド文芸劇場、ジョイス—、同上叢書、同巻、査読無、2013、22-37
- ⑫川島 隆、マウトナーのナショナリズム思想の展開 — 言語批判と「母語」礼賛のはざままで—、同上叢書、同巻、査読無、2013、38-53
- ⑬平野 嘉彦、マウトナーとカフカ — 仮説の検証、同上叢書、同巻、査読無、2013、54-65
- ⑭戸田 勉、マウトナーを読むジョイスとベケット、同上叢書、同巻、査読無、2013、66-77
- ⑮平野 嘉彦、あとがきにかえて、同上叢書、同巻、査読無、2013、78-84
- ⑯Yoshihiko Hirano、Zwischen Hoelderlin und Chagall. Einige philologische Notizen zur Celan-Lektüre. In: Transcarpathica. Germanistisches

Jahrbuch Rumaenien、査読有、11/2012 (巻)、2013 (発行年)、41-53

- ⑰結城 英雄、アイルランド文学ルネサンスとジェイムズ・ジョイス (3)、法政大学文学部紀要、第66号、査読無、2013、17-29
- ⑱桃尾 美佳、自分だけの部屋 — “A Painful Case”に見る不在の詩学、人文科学年報 (専修大学人文科学研究所)、第43号、査読有、2013、59-77
- ⑲Yoshihiko Hirano、Agrarisches als Letales. Zu den deutschen Uebersetzungen von Shakespeares Sonnets von George, Kraus und Celan、日本ツェラーン協会『ツェラーン研究』、第14号、査読無、2013、13-52
- ⑳吉川 信、ジェイムズ・ステューヴンズの幻想小説、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、第62号、査読有、2013、69-83
- ㉑石川 達夫、中欧と現代チェコ文化の「地誌学」、現文研究 (専修大学現代文化研究会)、第89号、査読無、2013、3-11
- ㉒桃尾 美佳、夜明け前のヴァンパイア — Bram Stoker とアイルランド吸血鬼文学、エール (アイルランド研究)、第31号、査読有、2012、32-46
- ㉓平野 嘉彦、カール・クラウスをめぐる偏倚の五章、思想、第1058号、査読無、2012、45-60
- ㉔川島 隆、オットー・ヴァイニンガーとカール・クラウス — 女性嫌悪から男性ジェンダーの再構築へ、思想、第1058号、査読無、2012、134-151
- ㉕田多良 俊樹、「ベルファストの贈り物」、あるいは大飢饉後のアイルランドにおける魔女 — 「土」の政治性を再考する、中国四国英文学研究、第9号、査読有、2012年、21-28
- ㉖川島 隆、Zwischen Richard Wagner und dem jiddischen Theater — Volk, Sprache und Kunst in den Erzählungen Franz Kafkas、ドイツ文学、第145巻、査読有、2012、155-171
- ㉗川島 隆、人間のような犬と、犬のような人間 — エーブナー・エッシェンバッハからカフカまで、日本独文学会研究叢書 (『動物とドイツ文学』)、87、査読無、2012、39-54
- ㉘吉川 信、北の作家たち — 「紛争小説」の現在、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、61、査読有、2012、103-110
- ㉙結城 英雄、『ユリシーズ』を読む — 百のQ&A (13)、すばる、4月号、査読無、2012、354-369
- ㉚石川 達夫、書き換えられる地図としてみの中欧、思想、査読無、1056、2012、3-8
- ㉛川島 隆、グリルパルツァー『リブツァ』における性と政治 — ボヘミアのリブシェ伝説の変遷との関連で、Azur、4 (巻)、査読有、2012、1-16
- ㉜川島 隆、カフカの見たベルリン「ユダヤ民族ホーム」— ユダヤ人の身体表象と社会事業の接点、コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点、4 (巻)、査読無、2012、331-347

[学会発表] (計26件)

- ① Yoshihiko Hirano, Die Wiederholung des <Gleichen>? Eine Obsession bei Kierkegaard, Nietzsche und Freud. Humboldt-Kolleg Kyoto 2014: <Wie gleich ist, was man ver-gleich-t?> Ein interdisziplinäres Symposium zu Humanwissenschaften Ost und West, 2014年3月2日、コープイン京都
- ② Minako Okamuro, Beckett in Japan, 「(不)可視の監獄 — サミュエル・ベケットの演劇と現代世界」展、招待講演、2013年12月7日、ローマ市立演劇記念館
- ③ Dietmar Goltschnigg, Karl Kraus und die Pragerdeutsche Literatur, 基盤(B)「プラハとダブリンII」主催ディートマール・ゴルトシュニッグ教授講演会、2013年11月12日、東京大学
- ④ 川島 隆, フリッツ・マウトナーのボヘミア小説、関西チェコスロバキア協会、招待講演、2013年11月9日、兵庫トヨタ自動車本社ビル
- ⑤ 木内 久美子、「擬人化」批判から「無知の知」の実践へ：マウトナー、ヴィーコ、ジョイス、ベケット、基盤(B)「プラハとダブリンII」主催マウトナー講演会、招待講演、2013年10月19日、京都大学文学部
- ⑥ 西村 雅樹、バルとマウトナー、基盤(B)「プラハとダブリンII」主催マウトナー講演会、招待講演、2013年10月19日、京都大学文学部
- ⑦ 平野 嘉彦、ニーチェとマウトナー、もしくは隠喩としての言語 — 同一性と類似性をめぐって、基盤(B)「プラハとダブリンII」主催マウトナー講演会、2013年10月20日、京都大学文学部
- ⑧ 吉川 信, Introduction: W. B. Yeats, “The Spirit Medium”, “Swedenborg, Mediums, and the Desolate Places”, ワークショップ1「モダニズムにおける<亡霊>と<声> — ダブリンとプラハを中心に」、日本英文学会関東支部第7回大会(2013年度夏季大会)、2013年6月22日、明治大学駿河台キャンパス、リバティタワー1086教室
- ⑨ 桃尾 美佳, W. B. Yeats, *The Words upon the Window-pane* における亡霊の声、同上ワークショップ、同年同日、同会場
- ⑩ 岡室 美奈子, ベケット...but the clouds...における亡霊のイメージと声、同上ワークショップ、同年同日、同会場
- ⑪ 城 眞一, リルケ：「声」の詩論 — 降霊会の記録前後を中心に、同上ワークショップ、同年同日、同会場
- ⑫ 川島 隆, 幽霊との交信 — カフカにおける交霊術と新メディア — 、同上ワークショップ、同年同日、同会場
- ⑬ 川島 隆, カフカが触れたマスメディアの報道と「コミュニティメディア」の役割、神戸・ユダヤ文化研究会、招待講演、2013年3月23日、兵庫県私学会館
- ⑭ 田多良 俊樹, Intertextual Re-Creation of the

Great Irish Famine by Post-Famine Writers: A Case Study of Joyce and Walsh, Global Legacies of the Great Irish Famine: Transnational and Interdisciplinary Perspectives, 2013年3月27日、Radboud University Nijmegen, The Netherlands

- ⑮ Steffen Hoehne, Kafka und Prag. Literatur-, kultur-, sozial- und sprachhistorische Kontexte, 基盤(B)「プラハとダブリンII」主催シュテフェン・ヘーネ教授連続講演会、2013年1月28日、京都大学
- ⑯ Steffen Hoehne, Deutsch-tschechische Beziehungen im Zeitalter der Restauration, 基盤(B)「プラハとダブリンII」主催シュテフェン・ヘーネ教授連続講演会、2013年1月25日、専修大学
- ⑰ Steffen Hoehne, Franz Kafka — Wirkung, Wirkungsverhinderung, Nicht-Wirkung in Mittel- und Ostmitteleuropa, 基盤(B)「プラハとダブリンII」主催シュテフェン・ヘーネ教授連続講演会、2013年1月24日、東京大学
- ⑱ 城 眞一, 導入1 [マウトナーとボヘミアの言語紛争 (『プラハの青春時代』)], 日本独文学会秋季研究発表会・シンポジウム「プラハとダブリン — 20世紀ヨーロッパ文学の二つのトポス (その2) — フリッツ・マウトナーとその射程」、2012年10月14日、中央大学多摩キャンパス
- ⑲ 石川 達夫, チェコの民族運動と言語闘争 — 非自明性打破の手段としての記号的世界の構築と現実化 — 、上記シンポジウム、同年同日、同所
- ⑳ 田多良 俊樹, ゲール語復興とアイルランド民族運動、上記シンポジウム、同年同日、同所
- ㉑ 平野 嘉彦, 導入2 [マウトナーとカフカ、ジョイス、ベケット]、上記シンポジウム、同年同日、同所
- ㉒ 平野 嘉彦, マウトナーとカフカ — 仮説の検証、上記シンポジウム、同年同日、同所
- ㉓ 戸田 勉, マウトナーを読むジョイスとベケット、上記シンポジウム、同年同日、同所
- ㉔ 飯森 眞喜雄, ホモ・ロクエンスの病としての統合失調症の言語活動を通して見た言語のありよう、基盤(B)「プラハとダブリンII」主催 飯森眞喜雄教授講演会(招待講演)、2011年11月26日、東京医科大学
- ㉕ Yoshihiko Hirano, Zweierlei Allegorien des Todes. Zu einer Dickinson-Uebersetzung Paul Celans, 中華民国徳語徳文学・徳語教師協会年次大会(招待講演)、2011年10月22日、台北・東呉大學
- ㉖ 桃尾 美佳, ‘The Distorted Vision’: Exile and Confinement in John Banville’s Novels. IASIL JAPAN, The 28th International Conference Symposium 1: Wounds and Cures in Irish Literature, 2011年10月8日、同志社大学

[図書] (計16件)

- ① 桃尾 美佳 (東雅夫他編)、春風社、幻想と

怪奇の英文学、所収論文：幽霊たちのいるところ — エリザベス・ボウエン「猫は跳ぶ」に見る幽霊屋敷の系譜、2014、403 (290-316)

②ちばかおり・川島 隆 (共著)、河出書房新社、図説 アルプスの少女ハイジ — 『ハイジ』でよみとく 19 世紀スイス、2013、128

③城 眞一 (編著)、日本独文学会 (発行)、日本独文学会研究叢書 097 プラハとダブリン — 20 世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス (その 2) — フリッツ・マウトナーとその射程、所収論文：まえがきにかえて、2013、84 (1-5)

④川島 隆 (青地伯水編)、春風社、啓蒙と反動、所収論文：ダーウィニズムの裏側 — ヘッケルの進化論から見たカフカ『あるアカデミーへの報告』、2013、281 (197-230)

⑤Minako Okamoto (Anthony Uhlmann 編)、Cambridge University Press、Samuel Beckett in Context. 所収論文：“The Occult”、2013、400 (337-347)

⑥岡室 美奈子 (岡室美奈子・川島健編)、水声社、ベケットを見る八つの方法 — 批評のボーダレス、所収論文：自動降霊機械としてのテレビベケット『……雲のように……』における霊媒／媒体をめぐる、2013、391 (337-361)

⑦Yoshihiko Hirano (Dietmar Goltschnigg 編)、Stauffenburg Verlag、Angst. Laehmender Stillstand und Motor des Fortschritts、所収論文：Kierkegaard und Konzentrationslager. Der Fragenkomplex „Angst“ bei Stekel, Freud und Celan. 2012、465 (191-195)

⑧結城 英雄 (富士川義之・結城英雄編)、国文社、亡霊のイギリス文学—豊穡なる空間、所収論文：『ユリシーズ』における亡霊たち、2012、384 (243-255)

⑨吉川 信 (富士川義之・結城英雄編)、国文社、亡霊のイギリス文学—豊穡なる空間、所収論文：亡霊メルモスの帰還—篡奪者たちのアイルランド、2012、384 (110-123)

⑩桃尾 美佳 (富士川義之・結城英雄編)、国文社、亡霊のイギリス文学—豊穡なる空間、所収論文：まなざしへの偏執—ジョン・パンヴィル『立証文書』に見る亡霊召喚、2012、384 (349-362)

⑪吉川 信 (翻訳、注解)、筑摩書房、ジェイムズ・ジョイス全評論、2012 年、513

⑫川島 隆、NHK 出版、カフカ『変身』：確かな場所などどこにもない (NHK テレビテキスト 100 分 de 名著)、2012、100

⑬石川 達夫 (塩川伸明他編)、東京大学出版会、ユーラシア世界 第 1 巻 <東>と<西>、所収論文：チェコ人のロシア表象と自己表象、2012、272(103-126)

⑭平野 嘉彦、平凡社、ボヘミアの<儀式殺人>—フロイト・クラウス・カフカ、2012、292

⑮岡室 美奈子 (岡室美奈子・川島健・長島健編)、水声社、サミュエル・ベケット！—これからの批評、所収論文：はじめに、霊媒

ベケット — 蓄音機としての『オハイオ即興劇』と『ユリシーズ』、2012、367 (9-15、291-320)

⑯Yoshihiko Hirano, Koenigshausen & Neumann, Toponym als U-topie bei Paul Celan. Auschwitz – Berlin – Ukraine. 2011、123

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

城 眞一 (JO, Shin'ichi)  
東京医科大学・医学部・教授  
研究者番号：60424602

### (2) 研究分担者

平野 嘉彦 (HIRANO, Yoshihiko)  
東京大学・人文社会系研究科・名誉教授  
研究者番号：50079109

吉川 信 (KIKKAWA, Shin)  
群馬大学・教育学部・教授  
研究者番号：70243615

戸田 勉 (TODA, Tsutomu)  
常葉大学・外国語学部・教授  
研究者番号：90217505

川島 隆 (KAWASHIMA, Takashi)  
京都大学・文学研究科・准教授  
研究者番号：10456808

桃尾 美佳 (MOMOO, Mika)  
成蹊大学・法学部・准教授  
研究者番号：80445163

### (3) 連携研究者

岡室 美奈子 (OKAMURO, Minako)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：10221847

結城 英雄 (YUKI, Hideo)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：70210581

石川 達夫 (ISHIKAWA, Tatsuo)  
専修大学・文学部・教授  
研究者番号：00212845

田多良 俊樹 (TATARA, Toshiki)  
香川大学・経済学部・准教授  
研究者番号：40510467

(平成 24 年度から連携研究者として参画)

### (4) 研究協力者

西 成彦 (NISHI, Masahiko)  
立命館大学・先端総合学術研究科・教授

飯森 眞喜雄 (IIMORI, Makio)  
東京医科大学・医学科・教授

HOEHNE, Steffen  
ヴァイマル音楽大学・教授

木内 久美子 (KIUCHI, Kumiko)  
東京工業大学・外国語研究教育センター・准教授

西村 雅樹 (NISHIMURA, Masaki)  
京都大学・文学研究科・名誉教授

GOLTSCHNIGG, Dietmar  
グラーツ大学・名誉教授

鈴木 里香 (SUZUKI, Rika)  
東京大学・人文社会系研究科・研究員